

支援でつながる北大と被災地

— 私もどこかに関わられるかも —

情報で人をつなぐ

震災の翌日「北海道にいる学生だからこそできる支援をしよう」と学生八人で北海道学生震災支援ネットワーク(HOSUP)を立ち上げたのは農学部四年の榎本大貴さん。自身がこれまで関わってきた学生団体や市民活動の人脈を活かし、参加者を募る支援活動の情報をウェブやフリーペーパーで提供。北海道と被災地をつなぐ、人のネットワークを構築しました。

また、「震災後の国づくりを担うのは若い世代」という考えから、被災地で活動した人やNGOの代表者らを招いて勉強会を開催。体験談を聞き、学生たちが意見交換できる場を設

けています。「変化を生み出す価値観をつくるのは若い世代。積極的にいろいろな人と話して、そんな価値観を養いたいです」

活動の原動力は「同世代の人たちが同じ復興というゴールに向かって頑張っている一体感と、自分たちがこれからの日本をつくっていくんだという自覚です」と笑顔で話してくれました。



勉強会で熱い思いを語るHOSUP代表・榎本大貴さん

できる人ができることを

工学部四年の郭逸群^{かくいつぐん}さんは「被災者のために何かしたい」と思い、北大の学生ボランティア活動相談室(※)を訪れました。相談員の「同じ気持ちの人を集めてみたら」という助言で仲間を募り、何ができるか話し合いました。「自主避難してきた人たちを避難先で支援する活

動が手薄なのは」と感じ、札幌に避難してきた子どもたちと遊んだり、地域に溶け込む機会を提供するために炊き出しなども行いました。「自分に余裕がないと他人は助けられない。できる人ができることを」という相談員の言葉を胸に、いままも活動を継続しています。

被災地に近い北海道

入学間もない五月に岩手県釜石市に行ったのは、総合理系一年の宮本桃子さん。震災時は福岡の実家にいた宮本さんが釜石に行った理由は「北海道は福岡よりも東北に近いし、考えるだ

けじゃなく行動が大事だと思ったから」。受入れ団体を自ら探し、避難所の子どもたちと遊んだり、浜辺を掃除したりしました。「ボランティアに行くという壁は高くも厚くもなかったです」

震災ボランティア派遣プロジェクト

学生を被災地へ

「学生ボランティアがほしい」。六月初め宮城県石巻市を訪れた宮内泰介さん（文学研究科教授）は、現地の被災者支援組織（PARCIC）から声をかけられました。研究でお世話になった石巻に恩返しをと「震災ボランティア派遣プロジェクト」を企画。七月五日から九月三〇日まで数人を約一週間



おちゃっこで地域住民と交流する下郷沙季さん

ずつ、計三人の北大生を派遣しました。

時間の経過とともにボランティア活動は泥出しや清掃作業から、コミュニティカフェの運営へと移っていきました。石巻には津波で一階部分が損壊したものの無事だった二階部分に住んでいた人も多くいたため、避難所より情報や物資が届きづらい自宅避難者の孤立を防ぎ、住民がお茶を飲みながら交流できる場として「おちゃっこ」が始まりました。

「おちゃっこ」で心の交流

九月二三日から最後のグループで活動した下郷沙季さん（文学部二年）は、地元の人と徐々に打ち解け、本音を語ってもらえるようになる、「なぜすぐボランティアに来なかったんだろ」と後ろめたさを感じました。しかし、「震災直後の悲惨な

状況を知らない若い人がいてくれると話題も暗くならないし、心が救われるようで嬉しい」と地元の人に言われ、自身の方が救われたそう。「その言葉をきっかけに、この人を喜ばせるために何ができるか具体的に考えられるようになりました」

最後の派遣だったため、自分たちが帰った後のおちゃっこを支える地元ボランティアの募集や引継ぎなどに奔走した結果、一週間の派遣予定が一七日間に延長。プロジェクトが終了したいまも月一回、友達に会いに行く感覚で石巻を訪れています。

事務作業も震災支援

このプロジェクトを札幌で支えた学生もいました。その一人が田村みゆきさん（文学部三年）。参加者の募集や、現地との連絡など事務作業を担当しました。中にはさまざまな理由によつて直前のキャンセルもあったそう。「現地に行かないからこそできることをただけです」

と苦労したエピソードも笑顔で話してくれました。「北大はやるうと思つたことができる場所。活動を通じて、新しい世界やいろいろな背景をもつた人たちに出会えます。自分ももっと頑張りたいという気持ちが次の活動への原動力になるんです」

大学での多様な学び

「学生はなるべく外へ」。そう話すのは発起人の宮内さん。「学生たちは現地で非常に可愛がってもらい、貴重な人間関係を築いた。これからどこに行ってもやっていけると思う」と誇らしげに語ってくれました。今回のプロジェクトでは、同じ文学研究科教授の櫻井義秀さんとともに、研究科の取り組みとして教職員から学生が現地に行く交通費の援助を募りました。「大学には多様な学び方がある。授業だけではなく社会への窓口はたくさんあるので、学生には能動的に学ぶチャンスを掴んで経験を積んでほしい」